

# 限りない可能性に期待して

藤村貞子

それが作文指導のための伏線である。

入学してきた四月の初めから、触れ合いを大切にしたい気持ちと、子供たちを取り巻く環境を知りたくて試みてる休日明けの『昨日のこと』の話し合いであった。

「先生！お話することあるよ」  
「ぼくも、あるよ」

月曜日の朝の一年生の教室。こんな会話をあちこちからはずむ。月曜日の話を早く聞いて欲しい声である。

六月二十三日 国語の時間。  
今日のめあては、(一)どこで (二)だれと (三)何をしたか、の話し方。

めあてを大きく板書する。おまけと

して、●どんなどつたか。ここには赤丸を付ける。おまけはむりにしなくていい。できたらお話すること、と前々からの約束である。

「ぼくは昨日ひよこと遊んだの」

「台所に飛んできたわがたを捕まえました」

このころになると、しりごみをする子も友達のまねをする子もほとんどなくなり、話題は多種多様に広がって楽しい。

「ひよことどこで遊んだのかな」と、(一)項目の脱落に気づいて追求する子。そろそろこの子たちの耳も、心して働くようになって頼もしい。

今日のわたしの仕事は、一人一人の語形の吟味と補正。ようやく人前でもおくせぬ話せるまでになつた子供たち

の心を、教師の不注意な言葉でしぶませることのないよう配慮して、表現の重複とめあての三項目の脱落がないよう助言する。その子なりのよさを認め賞賛、激励することが次の意欲に結びつくことは確かである。

語形を正すことに加えて、でき得る子には、事柄の様子を少し掘り広げる

ことも今日あたりからの予定。

「ひよこはどんなふうにしてえさを食べたの」

と、視点を当てそのときのことを思い出させる。

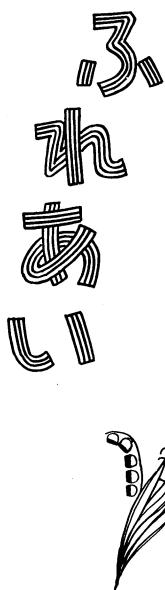
「くちばしでえさをつづいて食べたの。えさはね、米粒みたいのだよ。

食べたあとで地面にくちばしを何回もこすりつけてた」

「くわがたは、お父さんがうちわでバタバタたたいてやつとつかまた。足に糸をつけて、ぼくの机の足にしばつておきました」

既に順序よくまとまつたお話のできる子には、確かな認識の上に立つ個性的なとらえ方、創造的なとらえ方をさせて、ものをよく見る目と、それを正しく表現させる力を養つていきたい。

## 教育隨想



(いわき市立四倉小学校教諭)

表現のおもしろさに、その子の姿が浮かぶ書き表し方に、思わず共感を抱きながら小さな丸を幾つも幾つもつけやると、一生懸命数えている一年生。

今年もまた「とじ込み文集」を作っていく。毎回、毎回の作品を日付で書き入れて積み重ねていく個人ごとの文集。この一年間を……来年もつづり続け、また、お別れの文をはさんで返ってきた初期のころに比べて、「今日は、ぼくからお話させてね」と、催促してくるこのごろである。

作文を書くことも、文字をうろ覚えのころから一向に苦にしてない様子。とつとつながら考え考え鉛筆を走らせている姿……。おもしろいことがあつた、先生に知らせてやる、といった調子なのだろうか。

じょうず、へたは大いにある。読みにくいことも事実。

でも子供たちの生活がそこにあり、生の声がそこから聞こえてくる。